

聞く

(鳥取県 森田 東明)

〃 九月二十七日 奉天発シベリアに輸送

される

〃 十一月八日 第三〇地区第三收容所

で作業

昭和二十三年六月二日 ナホトカ第一收容所に

入る

昭和二十四年九月十七日 ナホトカ発帰国

〃 九月二十四日 舞鶴上陸

〃 九月二十八日 復員

職歴

昭和二十四年十一月 県に就職 県の課長を歴任

昭和五十四年三月 鳥取都市開発事務次長を

もって退職

昭和五十四年 鳥取砂丘「こどもの国」園長

昭和五十五年 協同組合鳥取鉄工センター

常務理事

平成七年

退職

現在、放送大学受講

## 私の戦前・戦後

鳥取県 谷口 富治

出生から出征まで

農家の二男として生まれる。母は私の小学校の卒業を待たず他界した。進学などできる家庭環境ではなかった。父の勧めで鉄道職員採用試験を受験した。運よく合格、就職することができた。駅勤務二年余で、鉄道教習所の専修科を経て、車掌試験を受け、米子車掌区で車掌三年余り勤めて、昭和十八(一九四三)年一月十日の入営となったのである。

徴兵検査は、昭和十七年兵、第一乙種合格で、不名誉な気持ちをもったものだった。

今思えば、車掌時代が私の青春時代であった。

二・二六事件に刺激された若い者たちのグループ

ができ、「明倫会」という会を作り、お互いに研さんする活動をしていた。吉田松陰の歴史も現地に行つて勉強しようということ、萩まで行ったことを思い出す。そのとき買って来た松陰の直筆「至誠而不動者未之有也」と松陰の肖像水墨画の条幅は、今も大切に保存している。入営が近づいたある日、親友の田中、近藤の三人は、堅い約束を交わしたのだった。「入営をしたら、上等兵など昇進は望まず、日本一の一等兵になるのだ」と。部隊はそれぞれ違っていたし、多忙に紛れ一度も音信はなかった。復員してみたら二人とも戦死していて、私一人が生き延びていた。

## 入 営

出征当日の昭和十八年一月九日、部落内の方々で氏神様に武運長久の祈願をしていただき、用瀬駅から、万歳万歳の歓呼の声に送られ、万感を胸に秘め、故郷を後にした。父は床に伏したままの重病で、起き上がることすらできず、別れがとて

も寂しそうであったのが、心配であり、心残りでもあった。当日の夜は、広島市内の旅館に一泊、ほとんどの人たちは、父兄の付添があつて、一夜の別れを惜しんでいたが、自分一人が部屋の隅で孤独を味わっていた。

翌十日が入営の期日である。決められた時間に、広島練兵場に集合した。関東軍から我々を受取りに来た将校の指揮下に入った。健康診断、予防注射等の、諸々の行事の後、軍服の支給を受けて、新兵らしくなった。このとき、靴が大きいとか小さいとか言っていたら、一喝「靴に足をあわせろ」とどなられたことを思い出す。また、軍曹に要領よく近寄り「班長殿」と言つて話しかけているので、殿呼びより「さん」呼びの方が親しみがあるのではと思ひ、軍曹の傍に寄り「班長さん」と呼びかけたところ、軍曹にいきなり「俺をなめるか……」と一喝されて、べそをかいたことがある。

そして深夜、隠れるようにして軍用列車に乗車

したのだった。下関駅に到着したのは、朝まだ暗い時刻だった。寒いプラットホームで国防婦人会のたすきを掛けた方々から、暖かい湯茶の接待を受けた。このとき言葉を交す間もなく、乗船場に向かったが、これで二度と内地の土を踏むことはないだろうと、しみじみと思った。この思いは、みな同じだったと思う。でも故郷に残した父たち家族のことが頭の中をよぎって、後ろ髪を引かれる思いが、覚悟はしてきたものの、どうすることもできなかった。

玄界灘で船酔いに苦しんだことも、忘れられないことの一つでもある。釜山からは、朝鮮鉄道で東側を北上する。車窓には、鱈が大きな稲架に干してあって、延々と続き、初めて見る光景で、非常に珍しく感じた。着いたところは羅南、山砲兵第二十五連隊、古年兵とは別で初年兵だけの訓練が始まった。寒さに耐える訓練でもあった。これまで経験したことのない寒さである。苦しいことばかりではなかった。時には、営外に軍歌演習に

出たとき、少尉殿から、大福餅屋の前を通ったとき全員が大福餅を食べさせて頂いたこともあった。短い期間ではあったが、ようやく軍隊生活や寒さにもなれて、この部隊を後に国境守備へと出発する日が来た。

#### 黒河北門鎮、国境守備隊

移動は、列車で輸送された。しばらくは楽しい旅行気分を味わった。歌の上手な者は、進んで歌を披露して、点数を稼いでいた。入隊した部隊は、関東軍第七国境守備隊、通称名は満州第八四部隊である。歩兵五個中隊、砲兵三個中隊、工兵一個中隊で、北辺鎮護の任に当たる、現役兵のみの、精鋭部隊である。難攻不落のペトン陣地である、丸山陣地を構えて、十榴・九〇野砲・高射砲を、また黒龍江岸には二十八センチ榴弾砲あり、加えて各中隊は、対岸にそれぞれ監視哨、トーチカをもち、対岸のブラゴエンチェンスクのソ連軍の心胆を寒からしめていたのである。

配属された中隊は、砲兵第二中隊で、九〇野砲をもつ馬部隊であった。第一期の検閲までみっちり基礎訓練が続いた。中隊長の精神訓話は軍人直諭、戦陣訓などの暗唱が主体で、軍人精神をたたき込まれた。

一期の検閲が終わり、一等兵の襟章をつけた頃から、よくビンタが飛んでくるようになった。ビンタで泣いている暇なんかない。北満に春の到来は遅い。野砲の観測手に指定され方向板を受持つことになった。毎日の訓練でなれてくれば、おもしろいこともある。営外訓練は、北満だけのよさもある、果てしない原野には、ユリが咲き、スズランが咲き、いろいろな野草が次々に咲き満ちて、実に天国の絵図のようである。訓練の合間に監視哨勤務あり、衛兵勤務ありで、冬の衛兵勤務はつらかった。猛吹雪の中、狼の遠吠えを聞きながら一人で弾薬庫を動哨する夜の長さは、例える言葉もない。こんなことは幾度もあった。

二中隊の監視哨は黒河の街の河岸にあった。ブ

ラゴエシチェンスクはすぐそこだ。勤務は一週間交替で、軍服を満人服に着替えて、一般の地方人になる。日常の言葉も、軍隊用語は使わない。

「さん」呼びで、名前で〇〇さんと呼ぶ。この時だけはビンタは飛んでこなかった。また夜の厩当番も苦手であった。馬に踏まれたり、蹴られたことも度々で、馬運動で遠乗りに出たとき、落馬し、馬だけ先に走って行ったこと等。大相撲の慰問団が黒河に来たときは、歩いて行ったが、衛兵下番で疲れていて見る段ではなく、人の影に隠れて居眠りをしていた。そして、秋季演習は他の部隊も加わり、夜の行軍がある。馬の後について歩き、休憩となると、馬の足をさすったり、遠い川まで行って水を汲んで来て飲ませたり、初年兵は休む時がない。また行軍中は疲れ切って、眠ったまま歩き続けた思い出がある。

そして一年が経過した。一年が経過すれば、当然二年兵になれる、と思っていたら、初年兵の入隊はなく、結局二年間下積み初年兵が続いた。

三年目にして、初年兵が入隊して来たが、地下足袋に竹の筒の水筒といった服装であった。このとき、関東軍の衰退を感じ、この先どうなるのだろうか、戦友たちと不安を語り合ったものだった。それから間もなく転属の命を受けた。結局、自分たちが関東軍の最後の現役兵であったのだった。

### 転属そして終戦

五六部隊と八四部隊の混成で新しく第一二五師団が編成されたようであった。師団司令部の兵技伍長に任命されたが、兵のいない下士官と将校だけの司令部で、任務は満州国皇帝の護衛に当たるということだった。黒河から真夜中に列車で通化へ向かった。車中で病死者が出たので、遺体を途中のお寺へ預けに下士官二人が途中下車したことを聞いた。

通化の司令部では、しばらく仕事はなかった。ある日、ソ連対戦車地雷の製作を命ぜられ、一人で奉天の兵器廠へ黄色薬の受領に行った。そして

貨車一両貸し切って、その列車に添乗して通化まで無事に帰る。このとき奉天の指定されたホテルに一泊したが、最初は断られ、無理を言って、物置のような部屋へ泊まることができたが、軍人に対する応対は、もう冷たく変わってきていたのを感じた。そして現地の満人女性を召集して、お寺の境内を借り、地雷(アンパン)作りを始めたが、結局この地雷は使用することはなかった。

終戦は通化で迎える。天皇陛下の玉音放送を聞いた後、師団長が訓話を行った。訓話は簡単で、次のような内容である。「師団長は自ら老骨にむち打って、ソ連軍に抑留されて行く。諸君は一日も早く、親や妻子の待つ故国日本へ帰還するため、命を大切に、健康に留意して、しばらくの抑留を辛抱するよう希望する」と。でも、ひげ参謀と、血気にはやる将兵の一部が、砲、弾薬をもって白頭山に立てこもったとの情報も流れた。自暴自棄となった血気盛んな下士官もいたが、兵器部には、残務整理を行い、兵器、弾薬をソ連軍に引

き渡すことを命ぜられて、宮本曹長を長とする下士官がその任に当たることとなった。直ちに、書類の焼却、将校の所持している拳銃、日本刀を集める。いろいろな情報が入ってくるが、真偽はわからない。そうこうするなか、ソ連軍の精鋭部隊が、落下傘で吉林に降下したとの情報が入ってきた。いよいよソ連軍兵士との直接の接触が始められるのだと思えば、胸が騒ぐのか、詰まるような複雑な思いがしていた。

間もなく、通化の司令部に、ソ連の兵士が到着した。このときは、もう満州国皇帝は通化を去っていた。降伏、兵器・弾薬の引渡しは、事務的にすぐ完了した。引続き完了式を行うことになって、ソ連軍はウォッカを、日本側はチャン酎を準備した。杯がなかったので、牛缶をあけて代用することにした。なみなみとお互いに注ぎ乾杯、ソ連兵たちは一気に杯を飲み干したが、日本側は一气にはいかなかった。こんなきつい酒は飲んだことがなかったからだ。完了式が終われば、軍人で

はない、腰につけていた軍刀は相手に渡して丸腰となったのである。直ちに用意していた二台のトラックに分乗してソ連軍と別れた。

糧秣だけは満載していたので、しばらくは心配ない。一気に朝鮮經由で内地日本に帰ることを計画したが国境の検問が厳しく到底検問通過はできないとあきらめ、郊外に一軒の空き家を見つけ、無断で入居してしまう。曹長一人別行動、旅館住い、一台のトラックには満語の達者な二人が朝鮮へ向かい別れたきりとなる。われわれは、北海道から木材を買い付けに来た会社員ということで、ごまかすことにする。軒先に軍用トラックが置いてあるのは目立つということで、満人に、二束三文で売却した。その代金は、分配して各自が非常用として腹巻の中に入れることにした。何日か退屈する生活が続いたが、のんびりと朝食をとっていたら、密告があったらしく、八路軍数人が銃剣をつけて、どかどかと、家の中へ入って来た。家の中にあつた食糧・器物みな軍用の物、おまけ

に拳銃まで見つかったのだからもうおしまい。何も抵抗することもできず、両手を揚げて降参した。後手に縛られたときは、もう殺されたと観念をした。それから市中を引き回されて、牢に入れられたのである。写真、身の回りの私物等は油紙に包み、名前を書いて、家の土間に穴を掘って埋めておいたが、今はどうなっているのだろうか。何日か豚箱生活を送った。一応トラックを売った金を持っていたので、食事の差し入れを要求して、腹を満たすことができた。この牢に入っている間に、通化事件があったことを聞いたが、内容については詳しく聞いていない。旅館生活で別れた宮本曹長の消息が全くないので、この事件に係はなかったのだろうかと心配もした。

## 抑留

牢から引き出されて、吉林に送られる。指導大学の校庭で、適当に編成されたので、同僚たちとは別れ別れとなってしまった。このときから抑留

生活が始まった。最初の昼食は大きな飯釜で煮た醬油飯だった。朝鮮で警察署長を務めていた人も、軍人、一般人で階級はもうない。要領のいいやつが指揮をとっていたように思う。

その日から労働が始まった。吉林を根拠地として、来る日も来る日も関東軍から押収した物資・資材等をソ連領内へ送り込む作業であった。非常用として格納してあった、食糧から被服類、手つかずの新品ばかり、山の陣地には隠し保管していたガソリン、物すごい量のドラム缶だ。ふだんは木炭でトラックを走らせていた関東軍であったから、あるは、あるは、この物資輸送のトラックはみなアメリカ製であった。この作業が一段落すると、こんどは鉄道のレールだ。あのレールを手積みだ、人力でトラックに積み込む、よくこんな力が残っていたと思った。

作業が終わる頃に「東京ダモイ」という声を聞き、内地へ送還されるものと皆が喜んだ。そして、行軍が始まった。これまで入浴はなく、着て

いるものもぼろぼろ、靴もまともなものを履いている者はない。疲れ切った体で、昼夜連続で歩き続けた。歩いている方向は全くわからない。喉が渴くので、道の水溜りの泥水を飲んで下痢した者も大勢いた。夜中の休憩は、寒くて、仮眠どころではない。大陸の夜は冷え込む。枯れ草に火をつけて、その中を歩き回って暖をとり、夜の明けるのを待ったものだった。ソ満国境を通過して、ソ連領内に入ったことを知り、ガツクリ、一度に疲れが出て、動けなくなった者が大勢いた。どこの駅かわからないが貨物列車に乗せられて、着いたところがウラジオストクであった。ウラジオストクから、ラーゲルまでそう遠くはなかったように思う。その日ウラジオストク駅の除雪作業に駆り出された。関東軍から押収したコンクリ切りの小さなスコップで雪かきをせよというのである。人海戦術だ。これでは作業能率はゼロ、構内の雪をかき回すだけで終わった。

翌日から本格的な労働が始まった。労働の主体

は建築作業、場所はレーニンスカヤ街で、毎日毎日歩いて通った。地下一階、地上五階のれんが建、ソ連軍将校のマンションだのことで、独ソ戦で中断した工事らしかった。抑留者の中には、左官、大工と技術者が大勢いて、ほとんど日本人だけで完成させたようだった。足かけ三年がかりで完成をさせた。最後に棟木に「日本人建之」と落書きをした。

日曜日は休みということだったが、日曜日には特別作業が必ずあった。各班に人員割り当てがあり、平常作業よりきつい労働であった。

港に船の荷おろしから積み荷の整理、石山にも行った。パン工場は製粉工場で原料の小麦の貨車おろしなどがあり、その他いろいろな臨時作業があった。港で原木の整理をして五、六人で肩から大木を投げおろすとき、過って木にはねられて倒れ脳震盪で意識を失ったこともあった。

ラーゲルでは、本間さんという、北海道小樽出身の年上の方と枕を並べて寝ていた。一つの寝台



(日本軍から押収したわら布団)に毛布一枚を二人で着て寝ていた。服は着たまま、零下三〇度、四〇度という夜中に用便は大変だった。凍てつく戸外の五十メートル以上も離れた便所まで走らねばならないのだった。食事当番も大変だった。一本のパンを七等分に切り分ける、どうしても、大きい、小さいができる、六人の目が光っているのが気になる。

スープは馬鈴薯<sup>ポテト</sup>と羊の肉が入っているということだったが、一度も見ることがない、馬鈴薯の皮が一片だけ浮いているのがたまにあるだけ。どこからか岩塩を探して来て、スープの量を増やして、腹の足しにしていた者もいたようだった。そのためか、病気になる、動けないようになると、他の収容所に移される。帰還の組になったのか、他の作業場に行ったのかは、定かではない。

五階建の立派なレンガの建物が完成したのが昭和二十三年のまだ寒い春、痔がものすごく悪化、耐えられなくなって、診断を受ける手続をした。

女の軍医であったが、診るなり「ニハラシヨ」と言って、何も手当てもせず、重病人の仲間に入り、ナホトカへ移送された。ナホトカへ着いてみると、皆ダモイ組と思われ、内地へ帰れるうれしさが、動作に表われているように見えた。

#### 帰還そして復職

ナホトカでは、作業はなく、いわゆる共産主義の学習がしばらく続いた。情報は、うわさがうわさを生み、気になる情報も入ってくる。あれほど戦中は米英鬼畜との教育を受けた者にとっては、占領された内地の事情は、ソ連以上に荒らされていると思うのは当然。村はあるのだろうか、家族は生きているだろうか、悪い方に想像してしまふ。もしも、家族がいなくなっていたら、一人で村の山奥に住み、馬鈴薯だけでも生きられると覚悟もした。夢も希望もなくしたこの体に、共産教育など身につかない。人の後蔭についてとほとほと歩いていくだけ、体力も気力も抜けきってい

た。

幾日か過ぎて、迎への船が入港して来た。集合の指示が出たが、持ち物は何もなく、着のみ着のまま、列に加わりタラップをとぼとぼと登って行った。輸送船は「山澄丸」という貨物船で、広い船内にはむしろが敷いてあり横になって寝転ぶことができた。昼食か夕食かは覚えていないが、最初に出た食事は、おかゆだった。米の香と味、何年ぶりか、懐かしく、そしておいしく、味わったことを覚えていて。そして一杯のおかゆで、気力・体力が湧きかえったような気分にもなった。「内地が見えたぞー」と誰かの声に、甲板に上って見る、近眼のわが目には、内地の島はボケて見えない。眼鏡を壊したが、レンズだけは一個胸ポケットに持っていたことを思い出し、取り出して目に当てて見ると、ほんとに内地だ。六年ぶりに見る内地の緑、涙が出て、こぼれ落ちた。しばらくは、近づく内地を見ていたが、上陸してからのことが、不安になりだした。本当に家族は生存し

ているのだろうか、病気で寝ていた父は、健康を取り戻しているのだろうか、と。当時の気持ちはどう表現していいかわからない。複雑な気持ちであった。

舞鶴に上陸、帰還業務を終える。受け取った手当か、見舞金か、金額は覚えていない。大金をもらった気分になった。屋外に小さな露店があったので、まず眼鏡屋がいたので眼に当ててみたら合うので買った。そして、リングが珍しかったので買った。もらった大金は全部なくなった。毛布一枚の支給を受け、列車に乗る。列車は復員者と一般の乗客で混雑していた。出発前に、支給された毛布を列車内で盗難の事例があるので、気を付けるようにとの注意もあった。たしか、香住の辺りだったと思う、鯉幟の泳いでいるのを見て、平和を取り戻しているのを、ひしひしと感じた。

父は健康を取り戻していて、元気な顔を見せてくれた。鳥取駅まで出迎えてくれた。そして、手作りの巻ずしをもって出て食べさせてくれた。こ

のときの巻ずしの味は何物にも代えられない味、生きて帰って来てよかったと、つくづく思ったのである。出迎えたのは、父が一人だけ、誰も迎えてくれる人はいない、名誉の帰還ではない、敗戦の捕虜が帰って来たのだと、つくづく思ったのだ。

帰還して幾日か過ぎ、何もすることなく、ぼんやりとしているある日、新聞で名前を見たといつて、以前満州で同じ部隊の先輩が、米子からはるばると訪ねて来てくれた。彼は運よく捕虜にはならず帰っていた。そして、私に復職を進めてくれた。復員して一カ月以内に、元の職場に向き、復職の意志を申し出れば、復職できると教えてくれた。まだ働くという気分ではなかったが、以前の職場米子車掌区まで出頭する。来て見れば、昔懐かしい者たちが大勢いたが、何か白々しい雰囲気を感じた。助役に会って、復員したこと、復職を希望することを告げると、車掌区も復員者でいっぱいだから、近くの駅にしないか、というこ

とで、用瀬駅に再就職することとなった。この頃、父の口から、海軍に現役入営していた兄が戦死していることを聞いた。戦死公報を受け遺骨が届けられたが、中には何一つ入っていないかった、と言って悔しさをあらわにしていた。でも石碑を立てて懇ろに葬ってあった。

駅の勤務もなれて来る。そして労働運動も次第に高まるにつれ、シベリア帰りは特別視されていたようであった。レッドパーシが叫ばれた頃は、職場を追い出されるのではと不安の毎日であった。でも停年退職の日まで勤めは続いたが、レットルは貼られたままだった。

昔を思い起こして、書きつづってみたが、五十年の過去は、淡いものになっている。苦しかったことは、風化して懐かしい思い出と化し、残っているようだ。とりとめのない文章となりましたが、以上で筆を止めます。

【執筆者の紹介】

生年月日

大正十一年六月二十三日

昭和十二年三月

用瀬尋常高等小学校卒業

同 十一月

就職 日本国有鉄道

十八年一月

退職

同 一月

現役兵として山砲兵第一二五連隊入営（羅南）

同 二月

満州第七国境守備（黒河）

十九年八月

兵長

二十年四月

技術伍長

同

第一二五師団司令部（通化）

八月

停戦（通化）

同 九月

抑留（吉林）

同 十月

同 ウラジオストック

二十三年五月

復員 舞鶴

同 六月

復職 日本国有鉄道

五十五年四月

停年退職

（鳥取県 谷村 憲一）

戦争と抑留

島根県 星野 誠 一

入隊

いよいよ昭和十九（一九四四）年一月一日は入営日である。今日は十月三十日。同郷の先輩、新竹五郎さんの招待を受けて、新京神社近くのお宅へお邪魔することにした。更けゆく夜も気に留めず盃を重ねるほどによもやま話に花が咲く、そして思い出を秘めつつ寝につく。明けて三十一日朝、新京神社前広場に集合する。既に四、五人集まっていた。新京駅のプラットフォームに上ると、大連方面より進行して来た客車の窓から顔を乗り出して「おいで、おいで」している者がおるではないか。近寄って見ると、十七年三月に別れた、旧制三刀屋中学校で同級生であった奥井君ではないか。驚きと同時に列車に飛び乗り、同席してい